編集後記

2024年は，森田療法を開発された高知県香南市出身の森田正馬先生の生誕150周年です．森田正馬先生のご実家である「旧森田家住宅」（通称：森田正馬先生生家）が，今年国の有形文化財（建築）に登録されました．12月に高知県で開催される日本森田療法学会では，森田正馬先生の生家や墓所をお参りいただけるエクスカーションを実施予定です．生家を文化財として保存するにあたり，その活用法について著者は香南市から相談を受ける機会が多くあります．そのため，水野雅文先生，久保田幹子先生，北西憲二先生，中村敬先生をはじめ，日本森田療法学会の多くの先生方から森田療法についてお聞きする機会があり，森田療法が開発された経緯や開発されてからの1世紀の歴史についても勉強するようになりました．世紀を越えて語り継がれる森田正馬先生の言葉の深さを実感しています．

高知に赴任して5年が経過し，高知県からの寄附による高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学も当初の任期を終えましたがさらに延長されることになりました．この間，県内の東部や西部，中山間地域の過疎地における子どもの心のケアにもかかわりました．また，赴任前から行っている伊豆大島での発達障害支援は高知に赴任後も継続しております．国内の子どものこころのケアの均霑化を図る場合，心のケアのリソースの少ない過疎地における多職種地域連携の推進が喫緊の課題です．

最近，このような過疎地の支援者から耳にするのは，心のケアに限らず，海外から輸入してきたカタカナ言葉の概念が非常に多く，たいてい2，3年で使わなくなるので，理解しづらいということです．患者さんのご家族のなかには，自分たちは長宗我部氏が治めていた頃からここにいる，どうせすぐ変わることは，まともに受け入れられないと拒否的な方もいると聞いたことがあります．発達障害臨床をはじめメンタルヘルス課題対策における多職種多領域の地域連携の実践には，メンタルヘルス・リテラシーに関する共通理解，共通言語が必要と以前からいわれています．時代を越えて有用な心のケアに関する普遍的な言葉の必要性を痛感させられます．

森田正馬先生は，メンタルヘルスに関する知識が現代ほど浸透していなかった時代に，精神疾患に苦しむ当事者のために，感覚的に理解しやすい素直な言葉を用いて，精神疾患の病態や対応方法を説明され，その理念は「生活の発見会」という現在まで続く自助グループ，ピアサポートへとつながります．精神医学研究においては，1990年代ころから，精神疾患の社会生活機能は精神症状よりも認知機能などの内的な表現型（エンドフェノタイプ）の影響のほうが大きいこと，精神疾患の精神症状の改善だけでは社会生活機能の向上にはつながらないことが報告されており，森田療法における「症状不問」は，現代にあって再評価すべき発想といえるでしょう．森田正馬先生は，国内外のさまざまな心のケアの技法について勉強し，精神疾患の当事者と生活しながら，森田療法を開発されました．森田正馬先生が論語から引用された「君子は和して同ぜず」という考え方は，多様性を受け入れるインクルーシブな社会をめざすためには必須でしょう．

異なる専門性をもつ人が，メンタルヘルスケアに関する共通の認識のもとに，地域全体の心のケアを行うためには，時代や専門性を超えて理解できる，普遍的な共通の言葉が必要です．現在の多職種地域連携を要するわが国の多くのメンタルヘルス課題に対応するために，ぜひ多くの先生方に高知におこしいただき，原点にかえって森田療法を学び，精神医学・精神医療のさらなる発展のためにご活用していただけると幸いです．

高橋秀俊